

会長講演抄録

悪性腫瘍診断への放射性同位元素の寄与とその歩み

久留米大学医学部放射線科 尾関巳一郎

1961年、第21回日本医学放射線学会総会の宿題報告は、放射性同位元素の医学的応用の主題で、寛、尾関の両名が分担した。この両名は規約改正によって、再出発したと云っても過言ではない新しい日本核医学会の片や理事長、片や会長として、車の両輪の如く今回の総会運営の衝に当たっている。奇しきえにしと云わざるを得ない。

この時の私の演題は「放射性同位元素の診断的応用、特に悪性腫瘍のRI スキャンニングを中心として」であった。この中では独特な久留米方式のカラースキュンの開発、それを用いての基礎実験としては ^{131}I -フィブリノーゲンによる動物腫瘍のスキュニング、臨床研究としては、脳、肺、肝、腎、骨の腫瘍或いは臓器スキュンに関する報告を行い、好評を博したものと愚信している。特に脳腫瘍スキュンについて、まとまった成功例が発表されたのは、このときが我国最初であった。

その後の核医学方面の研究も引続き、主に悪性腫瘍スキュンに関するものであり、基礎的には ^{131}I -標識のフィブリノーゲン抗体、フィブリン及びフィブリン抗体などの開発的、応用的研究、臨床的には RISA, ^{203}Hg 或いは ^{198}Hg 標識のクロールメロドリン、及び、塩化第二水銀、 ^{67}Ga クエン酸などによる腫瘍のスキュンである。勿論その間 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ 或いは ^{113}In 標識化合物類の各種対象への応用も行っている。スキュン方式もカラーからシンチカメラ、コンピューターの利用へと進歩したのは当然であろう。

併しこの間を通じ現在迄最も力を注いだのは脳腫瘍スキュンである。最近 Computer Tomography が世の注目を引き、脳疾患に関しては、これさえあれば RI 検査は勿論、血管撮影でさえ不要であるとの風評が流されている。我々の大学にも最近 EMI scan が入ったので、果して Brain scan は不要であるか否か、検討してみるつもりである。